

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 29 年 6 月 15 日現在

機関番号：14301

研究種目：若手研究(B)

研究期間：2013～2016

課題番号：25870640

研究課題名(和文) アーツ・アンド・クラフツ運動にみる非モダニズムの射程

研究課題名(英文) The framework of anti-modernism and non-modernism in arts and crafts movement

研究代表者

杉山 真魚 (SUGIYAMA, Mao)

京都大学・工学研究科・助教

研究者番号：70625756

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 1,900,000円

研究成果の概要(和文)：本研究では、成熟社会や非都市的集合体などに適合する芸術理論や社会理論の一端を構築することを旨論んで、20世紀の芸術・文芸思潮であるモダニズムの世界観によって捨象された自然観や文明観などを「非モダニズム」の視座として仮定し、その広がりについてアーツ・アンド・クラフツ運動を事例として記述することを試みた。モリスの書物論、アッシュビーの芸術教育論、ヴォイジーの建築思想、19世紀末英国の植物模様、大正期の日本におけるモリス受容を主たる研究対象とし、古典主義とロマン主義、科学と芸術、都市と村落、個人と集団などを対立的に扱わない思考的枠組みを提示した。

研究成果の概要(英文)：What I wish to show in this study is a theory about the relationship between art and society which comports with mature society or rural community. It is possible to say that there are lots of views of nature and civilization that have been disregarded under modernism. Based on this postulate, I termed these views anti-modernism and non-modernism, and tried to describe the range of these conceptions through analyzing the arts and crafts movement. Concretely, main subjects of this study were William Morris's theory of book, C.R.Ashbee's theory of art education, C.F.A.Voysey's architectural thought, botanical pattern-designs at the end of the 19th century, and the diffusion of knowledge about Morris in the Taisho period in Japan. In this research, I carefully examined the meaning of division between the two such as classicism and romanticism, science and art, city and countryside, individualism and collectivism, and finally suggested the way of thinking beyond dichotomy.

研究分野：建築歴史・意匠

キーワード：アーツ・アンド・クラフツ ウィリアム・モリス 非モダニズム 適合性 生命

1. 研究開始当初の背景

20世紀の芸術や文学を研究する際、合理化、普遍原理、国際様式などの表現をともって説明される「モダニズム」という思潮は避けて通れない。「プロト」「ネオ」「ポスト」などの接頭辞が付され、「モダニズム」以外の思潮がとりあげられることも少なくない。近年では、モダニズムが志向した「モダニティ」、あるいはその基盤としての「モダン・ライフ」、これらを好意的であれ批判的であれ再評価する研究が多岐にわたる分野において蓄積され、モダニズムが有する多義性が解体、整理されつつある。その一例として、「モダン・ライフ」を「20世紀最大の神話」と断言し、白物家電の宣伝広告を解釈学および図像学的に読み解いた原の著書『白物家電の神話 モダンライフの表象文化論』(2012)が挙げられる。地球環境時代にモダニズムの読み直しが盛んに行われる背景には、その理論が都市化された社会とその内部での想像力を前提し、過度な国際性を志向したことへの反省がある。モダニズムが有していた大衆への眼差しや歴史主義への懐疑的態度などを評価しつつ、都市のみに依拠せず、成熟社会、スローライフ、非都市的集合体などに適合する芸術理論や社会理論を構築することが求められている。

このような問題意識のもと、モダニズムを検討する上で注目されるのが、近代建築史上、近代建築の萌芽と記述されることもあれば、近代化への抵抗と解説されることもあるアーツ・アンド・クラフツ運動である。近年、レサビー (William Richard Lethaby, 1857-1931) やアッシュビー (Charles Robert Ashbee, 1863-1942) の伝記が著されたことに代表されるようにアーツ・アンド・クラフツ運動に関与した個別の人物への関心が高まっている。一方、アーツ・アンド・クラフツの全体像に関して、ブレイクスリーによって新資料を用いた作品集『The Arts and Crafts Movement』(2006)が公刊されたり、政治学者である菅による研究『イギリスの社会とデザイン』(2005)に代表されるように現在の視点からアーツ・アンド・クラフツ運動を読み直す試みがなされている。こうしたアーツ・アンド・クラフツへの注目は、これまでの研究における誤読が関わっている。建築学の分野においては、ペヴスナーの研究『Pioneers of Modern Design from William Morris to Walter Gropius』(1949)に代表されるように、アーツ・アンド・クラフツの実践家が装飾や建築について言及している部分を「モダン・デザイン」の黎明として読み解き、かれらの運動をモダニズムの一部として説明することが常套的であった。しかし、アーツ・アンド・クラフツの思想や実践を再び眺めると、かれらの関心は装飾や建築に限定されていないことやモダニズムの範疇で捉えきれない価値観を提示していることに気付く。かれらは装飾芸術や建築のみならず、

社会、環境、経済、宗教、文学などに関する著作を多く残しており、そこに豊かな生活環境を構築するための示唆的内容を読み込むことができる。これらに関する総合的な研究は手薄である。報告者は、アーツ・アンド・クラフツを制作と使用という人間存在の根本的事象に立ち返って記述できるのではないかという動機に基づき、「ウィリアム・モリスおよび近代の生活芸術思想史に関する建築論的研究」(DC2/工学/研究課題番号: 09J03329)を遂行した。そこでは、生活芸術という概念に注目し、装飾芸術と建築とを連想し得る思想体系の一端をモリスを中心に明らかにするとともに、地球環境時代において、近代的枠組みと異なる自然・人間・人間技術の関係を提示することを試みた。本研究では、この研究成果を踏まえ、アーツ・アンド・クラフツの工芸論・建築論・文学論・自然論・都市論・村落論・社会論などにおける非モダニズムの諸相を整理する。

2. 研究の目的

本研究は、成熟社会や非都市的集合体などに適合する芸術理論や社会理論の一端を構築することを目論んで、20世紀の芸術・文芸思潮であるモダニズムの世界観によって捨象された自然観や文明観などを「非モダニズム」(anti-modernism / non-modernism)の視座として仮定し、その広がりについてアーツ・アンド・クラフツ運動を事例として記述することを試みるものである。

本研究の主題に掲げる「非モダニズム」とはさしあたりふたつの側面をもつものとして定義する。ひとつは、「モダニズムの否定」(anti-modernism)としての理論・実践であり、もうひとつは「モダニズムではない」(non-modernism)理論・実践である。本研究ではこれらについてアーツ・アンド・クラフツ運動を事例として解明することを試みる。もちろん、アーツ・アンド・クラフツ運動は「モダニズム」の側面をもっていることも確かであるが、これについては先行研究が多く存在するのでそれらを整理するととどめる。「モダニズムの否定」としての側面については、アーツ・アンド・クラフツ運動の思想家・実践家が、手仕事と機械生産、集合の知と科学的知識、土着性と国際性、などの対立的問題をどう認識したか、「モダニズムではない」側面については、かれらがロマン主義などの過去の思潮や印象主義などの同時代の思潮にどう反応したかを記述・分析することを通して明らかにする。ただ、周知のとおり、アーツ・アンド・クラフツ運動は広範に及ぶ。発祥は19世紀英国であるが、その理論や実践活動は各国に伝搬(あるいは各国で自発的に展開)しており、すべてを本研究において網羅することは不可能である。そこで本研究では、アーツ・アンド・クラフツ運動の思想家・実践家に関わる著作や活動を整理した上で、報告者のこれまでの研究、

日本人研究者としての立場を考慮し、以下に示す項目を主たる研究対象としながら、上記の「非モダニズム」の射程を析出する研究計画を立てた。

(1)モリスの後継者として知られる建築家アシュビーの理論と活動：アシュビーは手仕事やギルドの精神を實踐する場として田園が理想であると考え、田園に移住した。しかしギルドの経営に失敗し、都市部に戻り、ライト(Frank Lloyd Wright, 1867-1959)の影響のもと自身の建築・都市論を修正していく。モダニズムに漸次接近していったと考えられるアシュビーの思想の揺らぎをモリスやライトの思想と比較しながら解明する。

(2)英国のヒール商会(Heal's, 1810-)の理念と活動：18世紀など過去のデザインを機械的に復元しつつも独自の解釈を加味した商会の作品は、「アンティークイティとモダニティの調和」とも言われる。モリス自身もモリス商会を設立しているが、ふたつの商会の活動等を比較分析することは、モリス以降のアーツ・アンド・クラフツ運動を把握する上で重要であると考えられる。

(3)民芸運動、とりわけ鳥取民芸運動における英国の影響：鳥取民芸運動を唱導した吉田璋也(1898-1972)はモリス関連の邦訳文献(約170点を確認済)を蒐集したり、18世紀の英国家具を模倣・発展させた鳥取民芸家具の製作を指示したりした。吉田についてはフィンランドで開催されたWorld Design Capital Helsinki 2012で特集されるなど、世界的に関心が集まりつつある。モダニズムが興隆した時代背景のもとで吉田がモリスや英国の伝統をどのように洞察したか調査・研究する。

3. 研究の方法

研究目的に示した3つの論題についてそれぞれ言説研究を行ったのちに作品研究へ移行する。本研究では、即座に工芸作品、建築作品、都市計画そのものを工学的観点や美学的観点から判断するのではなく、作品や計画以前の思索について、建築家(思想家)の言説を読み解く方法をとる。モリスの思想をひとつの軸として定め、類似点や差異の記述、概念の意味の変容などの分析を行う。その内容を踏まえ、作品研究を行い、理論と実践の一致する部分、相違する部分を抽出しながら理論の妥当性、限界、可能性等を指摘する。

4. 研究成果

平成25年度は、資料の収集・整理および英国アーツ・アンド・クラフツ運動と鳥取民芸運動に関する言説研究を中心に行った。研究成果は以下の6点にまとめられる。(1)研究体制の確立。(2)資料収集：日本の民芸運動と英国の関係に関連する資料の収集・閲覧に重点を置いた(吉田璋也、バーナード・リーチ、柳宗悦)。(3)アーツ・アンド・クラフツ運動の思想家・実践家の整理：関連文献を整理するとともに、関連人物の思想的特徴

と相関関係について整理・分析を進めた。(4)英国のアーツ・アンド・クラフツ運動に関する言説研究：ウィリアム・モリス、T・J・コブデン=サンダーソン、C・R・アシュビー、W・R・レサビーの著作を中心に解読を進めた。また、理論的背景を解明することも試みた。とりわけ同運動における「適合」の概念とパトリック・ゲデスの都市論の連関について、「美」の概念の意味の変容とジョン・ラスキンの思想の連関について検証した。(5)鳥取民芸運動に関する言説研究：まず、吉田が収集したモリス文献を整理した。次に、民芸運動とモダニズムの関係分析のための予備的考察として吉田璋也と丹下健三の民衆に関する言説を比較した。(6)研究成果の公表。

平成26年度は、英国アーツ・アンド・クラフツ運動の展開に関する言説研究と作品研究を中心に行った。研究成果は以下の6点にまとめられる。(1)英国のアーツ・アンド・クラフツ運動に関する言説研究：ウィリアム・モリス、ジョン・ラスキン、W・R・レサビー、C・F・A・ヴォイジーの著作を中心に解読を進めた。前年度に着目した「適合(性)」の概念とあわせて、「個性」や「性格」の概念について整理・分析した。当運動の展開を記述する上で重要な考え方である「集団主義」とそれに対置される「個人主義」について検討した。(2)英国のアーツ・アンド・クラフツ運動に関する作品研究：C・F・A・ヴォイジーの作品について、言説にみられる「性格」との関連から分析した。(3)現地調査1：前年度の研究を補完するために英国に渡航し、モリスに関連するハンプトン・コートやアシュビーゆかりのトインビー・ホールに訪問し、詳細の確認および写真撮影を行った。(4)現地調査2：次年度の作品研究の情報収集のため、ヒール商会やR・N・ショウの作品群の現状を確認した。(5)鳥取民芸運動に関する作品研究：吉田璋也が手がけた作品群について検討した。(6)研究成果の公表。

平成27年度は、前年度に引き続き、英国アーツ・アンド・クラフツ運動の展開に関する言説研究と作品研究を中心に行った。研究成果は以下の5点にまとめられる。(1)英国のアーツ・アンド・クラフツ運動に関する言説研究：日本におけるモリス受容という視点から、大正期の雑誌記事を中心に調べ、受容の諸相を整理した。(2)英国のアーツ・アンド・クラフツ運動に関する作品研究：モリスの自邸である「赤い家」について、日本における受容の観点から、富本憲吉(工芸家)、大槻憲二(批評家)、蔵田周忠(建築家)、柳宗悦(思想家)による評価を分析した。「作家性」という観点から整理することによって得られる、富本と柳の評価の相違点に関する知見は、日本における民芸運動を検討する上で重要である。(3)モリス商会の作品研究：モリスが手がけた作品群におけるモチーフの意味・独自性について検証した。(4)現地調査：前年度の研究を補完するために渡英し、

ヴォイジーの作品群に訪問，現状や詳細の確認および写真撮影を行った。(5)成果の公表。

最終年度となる平成 28 年度は，昨年度に引き続き，英国アーツ・アンド・クラフツ運動の展開に関する言説研究と作品研究を実施するとともに，これまで個別に発表してきた論考を横断する「非モダニズム」の視点を総括した。研究成果は大きく以下の3点にまとめられる。(1)英国のアーツ・アンド・クラフツ運動に関わる言説研究：当運動の主導者であるモリスと生年を同じくするクリストファー・ドレッサーの思想に着目し，植物学に基づく機械論的自然観を明らかにしながら，モリスらの生命論的自然観との相違点を論じた。(2)英国のアーツ・アンド・クラフツ運動に関わる作品研究：モリスとドレッサーの二人に焦点をあてながら，19世紀末の植物模様について考察した。(3)「非モダニズム」についての総括：日本建築学会建築歴史・意匠委員会，近代建築史小委員会が主催するシンポジウム「近代建築史の最先端」第12回において成果を公表する機会を得た。

以下，主たる成果の概要を記す。

(1)ウィリアム・モリスの書物論の構造 アーツ・アンド・クラフツ運動における生命論の一元流として：アーツ・アンド・クラフツ運動の拡がりを検討する端緒として，当運動の主導者として知られるモリスの晩年の言説，とりわけ書物論に注目し，芸術の理想的な在り方を捉えた「叙事詩的なもの」と「装飾的なもの」というふたつの概念を記述・分析した。まず，モリス晩年の活動における書物論がアーツ・アンド・クラフツ運動の方向付けと関わっていると同時に，「有機的芸術」に関する包括的論考であることを確認した。次に，「叙事詩的なもの」の枠組について「出来事」と「世界」という概念をめぐって明らかにした。続いて，「装飾的なもの」の枠組について形態，構成，伝承の三側面を示した。最後に「叙事詩的なもの」と「装飾的なもの」の両者に通底する「自然への愛」と「ロマンティックな特質」という制作以前の倫理的事柄を明らかにし，そこで得られた見解をもとに「世界の生命」としての民衆が共有する言語の問題について論じた。

(2)山陰海岸ジオパークマネジメントプランの検討と方向性：山陰海岸ジオパークにおける文化施設や環境学習施設の在り方について論じた。まず，当該地域に現在建っている博物館・資料館・情報館について，所在地，カテゴリ，事業主体，管理運営組織等を一覧に示した。次に，建築空間計画について，サイン計画を含めたユニバーサルデザインが採用されている事例，および建築空間それ自身が展示物と密接に関わる事例を分析した。続いて，環境学習施設としての教育的効果を高めるためにどのような展示内容が求められるか検討した。最後に，文化施設が機能する前段階としての「地域人＝文化の担い手」の育成の必要性を提示した。

(3)チャールズ・ロバート・アシュビーの芸術教育論における田園への眼差しについて：都市再建をテーマとするアシュビーの著書『偉大な都市の建つところ』に田園に関する記述があることに注目し，都市生活に芸術の活路を見出したアシュビーにとって田園がどのような意味を持っていたのか明らかにした。アシュビーは都市の周囲を形成する田園を通して土壌やその上で生活を営む農民のあり方を問い，それが「偉大な都市」という新たな居住地に永遠性という質的標準を付加する試みの延長上にあったことを論じた。また，アシュビーが田園における農民を取り上げ，農業とアーツ・アンド・クラフツの実践を「共通の市民権」「より大きな生命」という視点から捉えたことについて，ラスキンやモリスの工芸・民衆論を敷衍するものであると考察した。「より大きな生命」とは，中世的な閉鎖性とも近代の無限の開放性とも異なり，「より大きな」ものへと漸次的に発展し続ける拡張性を有する（仲間という集合意識など）ことを指摘した。

(4)アーツ・アンド・クラフツ運動における「適合性」の概念について：アーツ・アンド・クラフツ運動に関わる著作に散見される「適合(fitting)」と「適合性(fitness)」の概念に着目し，その広がりを整理・検討した。具体的には，アシュビー，モリス，コブデン＝サンダーソン，レサビーの記述をもとに，アーツ・アンド・クラフツ運動における「適合性」という概念が大きく以下の4つの関係性を捉えるのに使われる多義的概念であることを示した。生活環境の構成要素と用途との関係性， を満たしたものと美(絶対美)との関係性， 人間と仕事との関係性， 部分と全体との関係性(適合美)。さらに，「適合」や「適合性」の他にも「機能」という概念が運動の中で重要な位置を占めていたことについて，ゲデスの思想を援用しながら，生物学的な必然的相互作用として捉えられる「機能」の確からしさが「正しい」という倫理的判断基準となり，心身の健康や衛生を重視する近代生活に応答する住居や都市を論じる際に応用されたと解釈した。

(5)アーツ・アンド・クラフツ運動における「美」の変貌について：アシュビーが「適合性」を知覚する能力を「美の感覚」と呼んでいることに着目し，「適合性」と「美」の問題を主題的に扱っているラスキンとレサビーの言説をもとに，アーツ・アンド・クラフツ運動において美の枠組が変化していることを示した。ラスキンは構想的な神のもとで自足的に機能するものに，レサビーは実践的な個人のもとで目的連関の中で機能するものに美を見出していることを明らかにした。レサビーはラスキンが継続できない「肉欲的な喜び」を意味するものとして下位においたアイステーシス(古代ギリシア)を近代性や市民性の象徴として評価したと言え，それには産業社会における市民の消費活動を理論

によって牽引する意味があったと考察した。(6)アーツ・アンド・クラフツ運動における「個性」の概念について：1880年以降の美的判断の変容(絶対的基準から相対的基準へ)の中で、芸術家のデザインと職人の仕事に「個性」を求める傾向が強くなったことに着目し、まず、アーツ・アンド・クラフツ運動を取り巻く思潮(功利主義、唯美主義、中世主義、国家主義、社会主義、進化論)を取り上げ、「個性」に関わる諸問題について整理した。次に、ヴォイジエの著書『個性』(1915)を取り上げ、集団主義と個人主義の比較を通じて「個性」の意味について検討した。ヴォイジエは集団主義に対して懐疑的態度を示すが、これは世紀転換期に台頭した進化論的世界観によって、功利主義的原理、美の自立性、美の規範、英雄的決断、カトリック信仰、幾何学、労働者の主体形成など諸々の主義の中核をなす原理や原則が相対化され始めたことを示していることを論じた。また、ヴォイジエの主張する「個人主義」を一般化、形式化、計画化など、代替可能な主体が生まれる事態に警鐘を鳴らすものとして評価した。

(7)C.F.A.ヴォイジエの建築思想における「性格」の概念について：ヴォイジエの思想を取り上げ、「個性」や「個人主義」に立脚した実践方法の一端を明らかにした。個人主義に立った制作者や鑑賞者が個々人の精神内で涵養すべき性質であるとともに、制作や鑑賞の対象となる物質に具現化される「性格」という特質(例えば、威厳、優美、洗練、崇敬)について、実際の建築作品の要素(暖炉、扉、エントランス・ホールなど)を挙げながら分析した。最後に、ヴォイジエの建築思想の特徴として、物質主義的側面も近代精神の表象として考慮しつつ、「性格」という前時代的なニュアンスをもつ点を指摘し、「性格」を表現するためには、気候や風習などの土地の固有性への絶えざる応答、過度の表現を否定する自制心、他者との共通感覚が求められ、これらは近代主義に回収されない特質として評価できることを示した。

(8)日本におけるウィリアム・モリスの受容について 大正期を中心に：近代建築の黎明期に、モリスの思想や作品、およびアーツ・アンド・クラフツ運動が英国ひいてはヨーロッパにおいて広く参照されるとともに、日本にも伝播したことに注目し、とりわけ大正期のモリス受容の諸相について整理することを試みた。まず、モリス受容に関する基礎資料を示し、明治期(詩人としての評価)、大正期(社会主義への関心)、昭和初期(諸活動に即した各論の充実)、現在まで、という時期に分けて受容史を概説した。次に、モリス自邸「赤い家」の大正期における受容について、工芸家・富本憲吉、文芸批評家・大槻憲二、建築家・蔵田周忠の三者を取り上げ、いずれも底本が存在すること、および評価尺度が異なることを明らかにした。三者が重要視する点について、富本はモリスの作家性そ

のもの、大槻は住まい手の個性、蔵田は近代の建築家が目指すべき新たな作家性であることを論じた。

(9)ウィリアム・モリス自邸「赤い家」の受容について 柳宗悦の場合：思想家・柳宗悦による「赤い家」に関する記述について受容の一事例として検討した。柳は大熊信行の著書『社会思想家としてのラスキンとモリス』(新潮社、1927)を参照し、モリスの理論については高く評価していたが、「赤い家」そのものについては、ロマン主義の産物として否定的に評価した。このことにより、個人的作者を排斥する民芸論の立場を明確にできたことを論じた。また、「ゴシック」という概念を中心に柳とモリスの同一の鍵語を比較することを試み、柳は「ゴシック精神」を没我の協同性を希求することと理解し、モリスよりも制作の無名性を重視したことを明らかにした。

(10)19世紀末英国の植物模様：モリスとクリストファー・ドレッサー(Christopher Dresser, 1834-1904)の二人に焦点をあてながら、19世紀末の植物とデザインの関係、ひいては植物と住まいの関係について考察した。要点は以下のとおり。モリスは日常的な自然物や歴史的モチーフに秘匿された生命力を、ドレッサーは構成および色彩の追究を通じた英国性の創出を、壁面装飾の主題とし、両者とも自然の抽象化(コンベンショナルな表現)を装飾の方法論とした。モリスはピュージン(Augustus Welby Northmore Pugin, 1812-52)の装飾論(『花模様の装飾』, 1849)同様、倫理的観点から模様を捉え、個別の植物に固有の特徴を保持しながらそれぞれがもつ生命力を表現した(花の名前を図案名とする)。ドレッサーは機械論的な自然観のもと、植物に共通する構造を解明しながら幾何学的図案を創出した(花の幾何学的構造を重視し無味乾燥とした図案名を付す)。また、モリスがアカンサス文様を古代ギリシアまで辿った上で継承・発展させようとする点、ドレッサーが植物を幾何学的基礎のもと理想化して形態の対称性を重視すること、これらはヨーロッパの古典的伝統という点で共通している。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文](計13件)

- (1)「ウィリアム・モリスの書物論の構造 アーツ・アンド・クラフツ運動における生命論の一元流として」、杉山真魚, 日本建築学会計画系論文集, 第79巻 第699号, pp.1239-1247, 2014
- (2)「山陰海岸ジオパークマネジメントプランの検討と方向性」、中橋文夫, 糸谷正俊, 日置佳之, 新名阿津子, 杉山真魚, 鳥取環境大学紀要, 第12号, pp.33-52, 2014

- (3) 「チャールズ・ロバート・アシュビーの芸術教育論における田園への眼差しについて」, 杉山真魚, 日本建築学会 2013 年度大会学術講演梗概集(北海道), F-2 建築歴史・意匠, pp.545-546, 2013
- (4) アーツ・アンド・クラフツ運動における「適合性」の概念について」, 杉山真魚, 日本建築学会近畿支部研究報告集, 第 54 号計画系, pp.845-848, 2014
- (5) アーツ・アンド・クラフツ運動における「美」の変貌について」, 杉山真魚, 日本建築学会 2014 年度大会学術講演梗概集(近畿), F-2 建築歴史・意匠, pp.573-574, 2014
- (6) アーツ・アンド・クラフツ運動における「個性」の概念について」, 杉山真魚, 日本建築学会近畿支部研究報告集, 第 55 号計画系, pp.777-780, 2015
- (7) C.F.A.ヴォイジーの建築思想における「性格」の概念について」, 杉山真魚, 日本建築学会 2015 年度大会学術講演梗概集(関東), F-2 建築歴史・意匠, pp.375-376, 2015
- (8) 「日本におけるウィリアム・モリスの受容について 大正期を中心に」, 杉山真魚, 日本建築学会近畿支部研究報告集, 第 56 号計画系, pp.669-672, 2016
- (9) 「ウィリアム・モリス自邸「赤い家」の受容について 柳宗悦の場合」, 杉山真魚, 日本建築学会 2016 年度大会学術講演梗概集(九州), F-2 建築歴史・意匠, pp.241-242, 2016
- (10) 「19 世紀末英国の植物模様」, 杉山真魚, ガーデン研究会ジャーナル, vol.3, pp.1-10, 2017
- (11) 「連載 ウィリアム・モリスを再読する 日常生活への眼差し」, 杉山真魚, 『近代建築』2016 年 6 月号, pp.32-35, 2016
- (12) 「連載 ウィリアム・モリスを再読する 自然と調和する方法」, 杉山真魚, 『近代建築』2016 年 7 月号, pp.56-59, 2016
- (13) 「アーツ・アンド・クラフツ運動にみる非モダニズムの諸相」, 杉山真魚, 日本建築学会建築歴史・意匠委員会近代建築史小委員会平成 28 年度シンポジウム資料, pp.1-12, 2017

〔学会発表〕(計 14 件)

- (1) 「ウィリアム・モリスと吉田璋也 生活芸術への眼差し」, 公益財団法人鳥取民藝美術館主催たくみ 2 1, 2013 年 6 月 18 日, たくみ割烹店
- (2) 「チャールズ・ロバート・アシュビーの芸術教育論における田園への眼差しについて」, 日本建築学会 2013 年度大会学術講演(北海道), 2013 年 8 月 31 日, 北海道大学理学部 5 号館 5-301 室
- (3) 「倉吉の近代建築にみる伝統と先進性」, 倉吉市教育委員会平成 25 年度倉吉市生涯学習講座, 2013 年 9 月 28 日, 倉吉交流プラザ視聴覚ホール
- (4) 「山陰海岸ジオパークと文化施設」, 第

- 30 回全国都市緑化とっとりフェア記念フォーラム, 2013 年 11 月 2 日, パレットとっとり市民交流ホール
- (5) 「アーツ・アンド・クラフツ運動における「適合性」の概念について」, 平成 26 年度日本建築学会近畿支部研究発表会, 2014 年 6 月 21 日, 大阪保険医療大学 1 号館 4 階 142
- (6) 「アーツ・アンド・クラフツ運動における「美」の変貌について」, 日本建築学会 2014 年度大会学術講演(近畿), 2014 年 9 月 13 日, 神戸大学国際文化学部 M301 室
- (7) 「ウィリアム・モリスの生活芸術思想 晩年の書物論を中心として」, 平成 26 年度日本建築学会近畿支部建築論部会講演会, 2014 年 10 月 18 日, 大阪工業大学うめきたナレッジセンターセミナー室
- (8) 「アーツ・アンド・クラフツ運動における「個性」の概念について」, 平成 27 年度日本建築学会近畿支部研究発表会, 2015 年 6 月 27 日, 大阪保険医療大学 1 号館 5 階 151
- (9) 「C.F.A.ヴォイジーの建築思想における「性格」の概念について」, 日本建築学会 2015 年度大会学術講演(関東), 2015 年 9 月 6 日, 東海大学湘南キャンパス 1 号館 1A-303 室
- (10) 「分離派建築会とウィリアム・モリス」, 分離派 100 年研究会, 2015 年 9 月 14 日, 京都大学工学部 3 号館西棟 4 階 W404 室
- (11) 「ウィリアム・モリスと植物」, イギリス・ガーデン研究会, 2016 年 4 月 23 日, 神戸大学文学部 六甲台第二キャンパス人文学研究科棟 135 小ホール
- (12) 「日本におけるウィリアム・モリスの受容について 大正期を中心に」, 平成 28 年度日本建築学会近畿支部研究発表会, 2016 年 6 月 26 日, 大阪保険医療大学 6 号館 3 階 631
- (13) 「ウィリアム・モリス自邸「赤い家」の受容について 柳宗悦の場合」, 日本建築学会 2016 年度大会学術講演(九州), 2016 年 8 月 24 日, 福岡大学 A 棟 A606 室
- (14) 「アーツ・アンド・クラフツ運動にみる非モダニズムの諸相」, 日本建築学会建築歴史・意匠委員会近代建築史小委員会平成 28 年度シンポジウム, 2017 年 3 月 7 日, 建築会館 308 会議室

〔図書〕(計 1 件)

- (1) 『建築制作論の研究』, 共著, 中央公論美術出版, 2016 年 2 月

〔産業財産権〕なし

〔その他〕なし

6. 研究組織

- (1) 研究代表者
杉山 真魚 (SUGIYAMA, Mao)
京都大学・大学院工学研究科・助教
研究者番号: 70625756